

論 文 審 査 の 要 旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

久恒 靖人

主論文の題目

および

掲載誌・審査委員

題 目：Prospective Study of Postoperative Pain Following Adult Inguinal Hernia Repair by Transabdominal Preperitoneal Approach Versus Anterior Approach （腹腔鏡を用いた腹腔内到達法による腹膜前修復法と鼠径部切開前方到達法による成人鼠径ヘルニア術後疼痛の前向き研究）

掲載誌 Journal of St. Marianna University 2017; 8: 65-74

主査 井上 莊一郎

副査 古田 繁行

副査 五十嵐 豪

[論文の要旨・価値]

本研究の目的は、申請者が過去の報告や自身の経験に基づいて立てた「成人鼠径ヘルニア手術において、腹腔鏡を用いた腹腔内到達法による腹膜前修復法（transabdominal preperitoneal approach：以下TAPP）のほうが、従来の鼠径部切開前方到達法（anterior approach：以下AA）よりも術後痛の程度が低い」という仮説を検証することであった。そして、術後痛の程度をより定量的に評価するために、電流知覚閾値測定装置であるPainVision®による測定が用いられた。

本研究は本学の生命倫理委員会の承認を受け（承認番号：第2980号）、全身麻酔下に定時の片側鼠径ヘルニア修復術を受ける成人患者を対象とした。術式は、患者自身が試験参加に同意後、選択した。PainVision®による測定は、入院時、術後1日目（POD1）、2日目（POD2）に実施した。入院時は各患者の固有痛み度（PI）を算出し、POD1、2は患者が立ち上がった際の痛みの程度を対象に、創部痛み度（WPI）を算出し、調整創部痛み度（AWPI：（WPI/PI）×100）を求めた。また、Modified Prince Henry Pain Score（MPHPS）でも術後痛の程度を評価し、これらを術式間で比較検討した。

対象は89名（TAPP群46名、AA群43名）で、背景因子に差はなかった。POD1、2のAWPIに群間差はなく（POD1:TAPP群 193.2±27.9 vs AA群 200.4±32.9；P=0.86、POD2：TAPP群 160.0±23.5 vs AA群 138.7±17.1；P=0.47）、MPHPSによる評価でも、咳やくしゃみで痛みを感じない状態になるまでの日数に群間差はなかった（TAPP群 7.4±2.8日 vs AA群 8.7±3.4日；P=0.23）。副次的解析としてAWPIと手術時間、肥満度、年齢の関連を評価したが、相関はなかった。

本研究は十分に練られた計画のもとに実施され、症例数も十分であった。上記ふたつの術式の術後痛を電流知覚閾値測定で比較した点はオリジナリティがあり、診療に役立つ結論が導かれた点とあわせて、本研究は価値があり、学位授与に十分値するものであると判断した。

[審査概要]

主査と副査2名、指導教授の陪席のもと、約25分の発表のあとに、質疑応答が行われた。もっとも時間を費やした討論は、痛みの評価についてであった。電流知覚閾値で痛みの程度を評価した新規性は高く評価できる一方で、痛みの臨床研究での評価法のゴールドスタンダードであるvisual analogue scaleも用いるべきではなかったか、という点が、評価者全員の意見であった。これに対し、申請者は自説を的確に回答していたとともに、今後、研究を発展する上で取り入れていくことを述べていた。その他にも、症例数の設定、両手術の組織剥離範囲や腹膜損傷の有無、腹壁の部位による痛みの違いなどについて、活発な質疑応答となり、これに対しても申請者は的確に回答していた。

最 終 試 験 結 果 の 要 旨

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価]

発表は動画で両術式を紹介し、図表を適宜用いた構成で、その内容から申請者は本研究に関連する幅広い知識を有していると判断した。発表、質疑応答の態度は誠実かつ丁寧で、学位を授与するに値する人物であると判断した。英語能力も学位を取得するに十分な語学力を有していると判断した。